

【書評・紹介】

岡和田晃 (編)

『現代北海道文学論：来るべき「惑星思考 (プラネタリティ)」に向けて』

(札幌, 藤田印刷エクセレントブックス, 2019年12月, 210頁, 1800円+税)

笹倉 いる美

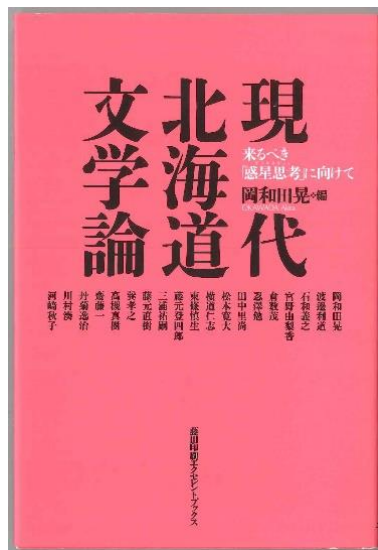
2019年の北海道民族学会境界の出来事として、長年北大前で営業されていたサッポロ堂書店(1981年～)の事業縮小を覚えておきたい。店主である石原誠さんが毎年発行されていた『北海道文献目録』も42号を最終号とされた。サッポロ堂さんにはどれだけの研究者がお世話になっただろう。巻末に綴られているご息女の石原真衣さんの、冷静でありながらもお父様への愛情あふれる文章からは、北海道の古書店としての矜持が読み取れる。

ここに紹介する『現代北海道文学論：来るべき「惑星思考 (プラネタリティ)」に向けて』も、タイトルにあるよう北海道にこだわったものだ。ただし直球ではなく、19名の執筆者に道外出身者が多いことが「よくある地域振興本とは一線を画している」と自己評価されている。

対象となった作者あるいは作品と北海道との関係は、作家が北海道出身者であったり、作品に北海道の地名が出てきた程度だったりというように、その深さは一様ではない。取り上げる文学の幅も広く、詩集や歌集も含まれている。紹介文のなかで文学そのものだけでなく、しばしば映画化の情景にも触れているのは、今回とりあげた文学がたまたま映画化されたものが多かったのか、それとも北海道を文学の題材にする時、ストーリーよりも情景が印象に残るのか。

編者の岡和田は「北海道文学を抜本的にアップデートすること。一言で説明すると、それが本書の試みである。あなたは北海道文学と言われたら、いったい何を想像するだろうか。(中略)いずれも現在の自分と無縁な、カビの生えた回顧にすぎないと思っていないか? そうだとしても、やむをえない。大学で研究される日本近代文学の伝統は、あくまでも「東京」という「中央」を基盤としており、北海道をはじめとした「周縁」は、付け足しに留まることが多いからだ。ジャーナリズムは、しばしば「田舎臭い」と「地方」の文学を軽視する。

(中略) これらの潮流へのカウンターとして、アカデミズムとジャーナリズムを架橋し、既存のジャンルをまたぎ超えながら北海道文学を最提起していくことが、まさしく本書の目論見なのである」とする。



- 第一部 「北海道文学」を中央・世界・映像へつなぐ
第二部 「世界文学」としての北海道 SF・ミステリ・演劇
第三部 叙述を突き詰め、風土を相対化 「先住民族の空間」へ
補遺 からなっている。

第三部が特に、北海道以外の文学との違いが出る部分だろう。丹菊逸治の「アイヌ口承文学研究—『伝統的世界観』にもとづいて」、樺太アイヌ、ウイルタ、ニヴフ—継承する『先住民族の空間』は、書店においても目にふれづらいこの分野を的確に案内している。

石和義之は、小笠原賢二の小説には「アイヌ民族が登場する作品はなく、このことは小笠原がアイヌが見えない風景の中で育ったことを意味する」とする。ここは重要なポイントであるように思った。アイヌが見えない風景とは具体的には何をさすのか。小笠原が実際にふれあうことがなかったのか、それとも、居るのに見えなかったのか。ふれあうことがなかったとしても、作品に表すのは可能であろう。それならばなぜ見えない風景なのか。

補遺において岡和田は樺太アイヌのヤヨマネクフ（山辺安太郎）と、ブロニスワフ・ピウスツキを主人公にすえた小説・川越宗一著『熱原』（文藝春秋）にふれる。『熱原』は第162回直木賞を受賞したことから、注目をあつめており、NHK 北海道では番組がつくられたほどだ。ところで、熱原には「この物語は史実をもとにしたフィクションです。」とあり、井上靖、司馬遼太郎、黒岩重吾等々の歴史小説と並べてよいのだろうかを考える。本書でとりあげられている池澤夏樹の『氷山の南』では、保莉実の『ラディカル・オーラル・ヒストリー』（御茶の水書房）が使われており、『熱原』では『ゲンダーヌ：ある北方少数民族のドラマ』（徳間書店）で紹介されるウイルタのダーヒンニエニ・ゲンダーヌさんがモデルと思われる源田が登場する。そして源田は人を撃ち、ゴシプシエィ（ウイルタ語）と叫ぶ。両者とも参考文献にはあげられているのだが、モデルとはいえ、ゲンダーヌさんには人を撃ってほしくないと思ったし、またゴシプシエィは、『ゲンダーヌ』において章名になるほどの言葉であり、違和感をもった。

研究者の成果が文学へと形をかえる、あるいは先住民の文学が、マジョリティの文学へと形をかえる。今後その例は増えていくように感じる。次の北海道文学論では、ぜひこの部分について追求してほしいと思う。

（ささくら・いるみ／北海道立北方民族博物館）